ピノチェト来日阻止に向けての闘いをおし進めよう！

大道寺より木田同志へ

80年11月25日付

(1) エスメラルダ号攻撃の革命的意義

木田同志、元気ですか？ 同志が下獄してから直接連絡することができなくなりましたが、私は、同志が刑務所当局による重包囲弾圧に屈せずに闘い抜いていることを確信しています。この手紙が刑務所の塀を乗り超えて同志の手元に届くことを念じて、久しぶりにペンを執りました。

一九七五年七月二三日、沖縄海洋博会場における、チリ反革命海軍練習艦エスメラルダ号に対する同志の単身火炎ビン投擲攻撃から五年余りが過ぎましたが、今あらためて、同志の戦いの革命的意義が確認されなくてはなりません。何故なら、チリのファシスト、ピノチェトの来日が、一九八一年初頭にも予定されており、それを阻止する闘いが組織されなくてはならないからです。

一九七〇年一〇月二四日、チリ議会で多数を獲得したアジェンデは人民連合政府を樹立し、銀行、保険会社、銅・硝石・鉄鉱の鉱山などの国有化や土地改革を行ないました。これらの改革は、それまでチリの政治、経済、文化を牛耳ってきたUSA系多国籍企業や一部の財閥、地主の利益のためではなく、労農人民の生活の改善として、つまり、住宅建設、教育条件の改善、社会保障の拡充、健康管理の充実などとして結実していきました。しかし、ここではっきりさせておかなくてはならないのは、人民連合政府は、チリ社会党、共産党、社会民主党、急進党などからなり、その基盤は、都市の基幹産業労働者であった、ということです。つまり、アジェンデによる「社会主義的改革」は、主に都市の上・中層労働者階級に向けたものであって、流動的下層労働者やポブラシオネスとかカリャムパと呼ばれる都市スラムに住む貧民、

貧農、そして原住民アラウカーノ族、マプーチェ族に向けたものではありませんでした。そのため、下層の労農人民による反乱が続き、更なる革命が準備されていたことを確認しなくてはなりません。でも、人民連合政府は、USA系多国籍企業や財閥、地主による収奪をストップさせたのは事実であり、更なる革命に向けた序曲として大きな意義をもっていたことは否定できません。

チリ人民連合政府の諸改革の遂行に対して、チリの軍部ファシストと財閥、地主どもは、USA系多国籍企業（特に、ITT＝国際電信電話会社など）とCIAによる大量のドルと謀略機能を後循として、人工的な物資不足などの経済的混乱を生じさせ、チリ人民の生活を圧迫し続けました。そして奴らは、奴ら自らがそうした経済的混乱を引き起こしながら、それを人民連合政府の経済政策の失敗だとデッチ上げて、反アジェンデ・キャンペーンを繰り返し展開し、反革命クーデターを準備していったのです。

人民連合政府は、反革命勢力を掃滅し、革命権力を創出していく闘いの過程を経ることなく、つまり、人民総武装を実現していく長期の人民戦争を戦い抜くことなく、選挙という手段によって成立したことから、旧来のブルジョア軍隊や警察機構を解体できずにそのまま残し、結局、自らにとっての反革命墓掘り人を温存してしまったのです。

七四年五月、人民連合はチリ人民へのアピールを発表し、反革命クーデターを阻止できなかった原因を三点挙げています。第一に、人民連合が単一の政治的指導を確保できなかったこと、第二に、労働者階級の孤立を避け、住民の大多数を労働者支持に向けることができなかったこと、第三に、チリ軍隊の内部情勢と特殊な性格（人民連合時代においても、USA帝から援助を継続されていた）についての理解が欠けていたこと、というものです。しかし、私はこの総括はアイマイであり、間違っていると思います。前にも少し触れましたが、人民連合の内実が、基幹産業労働者階級＝中・上層労働者階級に依拠した社共を軸とした連合であったことの必然として、人民連合が真に解放されるべき下層の労農人民、原住民との真の結合をめざさなかったこと、そして、彼らを主体にして反革命勢力を掃滅しなかったことに敗北の原因があった、と私は考えています。反革命クーデターの分析をすることが目的ではないので、簡単なものにとどめますが、人民連合の革命的不十分性、不徹底性の中に、反革

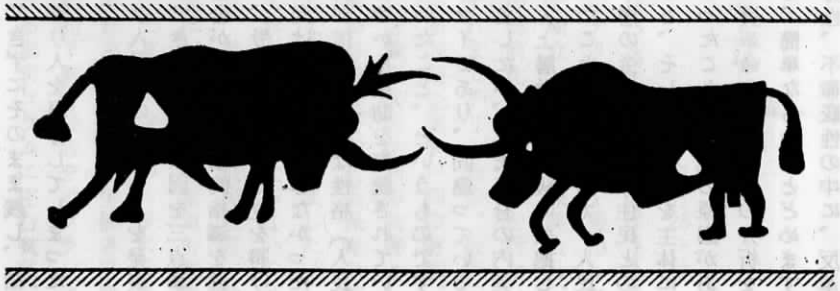
命クーデターを許してしまう条件があったことを確認できるでしょう。

一九七三年九月一一日、人民連合政府は、そして下層の労農人民と原住民による更なる革命の萌芽もまた、陸軍司令官ピノチェトを頭目とする陸・海・空三軍と警察軍による反革命クーデターで転覆させられ、アジェンデをはじめとする三万人以上もの人民が、人民連合を支持していたということで裁判なしで処刑されたり、拷問の果てに殺されました。そして、一〇万人にものぼる人人が逮捕され、裁判が開かれないまま北部砂漠地帯や南部の厳寒の離島などに急造された収容所に、長期にわたってぶち込まれ続けました（チリの人口は約一千万人ですから、虐殺、投獄された人々がいかに多いことか！）。

このようにチリ人民連合政府を圧殺し、チリ人民を虐殺、投獄して成立したピノチェト反革命軍事独裁政権を認めず、チリ人民、とりわけ下層の労農人民、原住民アラウカーノ族、マプーチェ族と連帯して闘うことは、世界帝国主義を打倒し、民族解放を戦いとろうとしている全世界の人民の当然の任務です（中国政府は、ピノチェトらの反革命クーデターの翌日の一九七三年九月一二日、人民連合政府の在中国大使を追放し、ピノチェト反革命軍事独裁政権を承認しました。そして、ファシストの将軍どもを英雄として中国に迎え入れたのです。何たることか！）。

木田同志は、この当然の任務を、エスメラルダ号に火炎びんを投擲する戦いとして敢然と遂行したのです。「チリ軍事独裁政権（ピノチェト）による、人民と革命的左翼に対する虐殺、拷問と弾圧に対するわれわれのささやかなる返答である。」と宣言して。

同志のエスメラルダ号攻撃の革命的意義は、特に次の二点を確認できると思います。



第一に、国際主義を単なる口先きのものではなく、闘う事実行為＝実践として突き出したことです。現在、日帝本国人総体が被植民地人民に寄生し、彼らの犠牲の上に肥え太り、「革命」派もまた、彼らからの搾取と収奪のおこぼれにあずかっている必然として、「革命」派ですら、日帝を撃滅していくという革命への情熱と意欲を失い、せいぜい自分たちの利害に関わることについては「闘う」という日本人中心主義に陥っています。そして、こうした状況は、当然のように国際主義を単なる掛け声にすぎないものとしてしまい、韓国における反帝・反日・反政府の闘いにさえ、有効に呼応して闘えない（闘わない）こととして表われています。ましてや、日本とは地球の反対側にあるという地理的な遠さから、ピノチェトらの反革命クーデターに怒り、チリ人民、とりわけ下層の労農人民、原住民の闘いに注目し、呼応して闘かおうとする日帝本国人は極めて少なかったと思います。こういう中で、同志はチリ人民、原住民アラウカーノ族・マプーチェ族との一体感を抱き、彼らの闘いに呼応、連帯するエスメラルダ号攻撃によって、国際主義を闘う事実行為として突き出したのです。

第二に、日帝本国内における武装闘争の現実性、すなわち、武装闘争が今現に闘われており、そして今後も闘われるという現実的可能性を突き出し、明らかにしたことです。同志の戦いは、単身モーターボートでエスメラルダ号に突撃し、火炎びんを投擲した結果、退路を確保することができなくて逮捕されてしまい、戦いの永続性を勝ちとっていくゲリラ戦としてはやりぬけませんでした。この点は、今後、組織的、計画的に戦うことで克服していかなくてはならないと思います。しかし、こうした課題を残しつつも、同志はチリ人民、原住民との連帯を決して単なる口先きだけに終らせずに、苛酷な状況下での彼らの戦いとの同質性を追求して、エスメラルダ号を一部炎上させるという物質的なダメージを与えたことによって、日帝本国内における国際主義に貫徹された武装闘争の現実性を断乎として突き出したのです。

同志の戦いの革命的意義を、このように確認したならば、われわれは日本人中心主義を克服し、世界中至るところで反帝民族解放の闘いを展開している人民との一体感を獲得して、彼らとの連帯を戦う事実行為で実現していかなくてはなりません。そして、その戦いは、世界帝国主義の中枢に位置している日帝を撃滅していく戦いで

なくてはなりません。すなわち、日帝本国人としての自分たちの反革命性を自己否定しつつ日帝の政治、経済、軍事の中枢を撃つ反日武装闘争を軸とする反日闘争＝反日人民戦争を永続的に闘い抜かなくてはならないと思います。そして、ピノチェトの来日を阻止する闘いは、まさにこの一環として組織されなくてはならない、と私は思うのです。

(2) ピノチェトの来日を阻止しよう！

一九七三年九月一一日のピノチェトらによる反革命クーデターから七年が過ぎました。この七年間、ピノチェトは、チリにおける政党活動を禁止して、闘う人民に対する徹底的な拷問と弾圧を続けました。そして、こうした暴力支配を背景にして、去る九月には、一九八九年まで通算一六年間も、ピノチェト反革命軍事独裁政権の存続を認める国民投票なる茶番を強行したのです。

「アムネスティ」の報告によると、一九八〇年七月一五日、チリ陸軍情報学校校長ロヘル・ベルガラ・カンポス中佐が車で通勤途中、電力会社の労働者の服装をした四人の都市ゲリラに射殺されたということですが、その後二千人もの人々がデッチ上げ逮捕され、拷問センターに送られてメチャクチャな拷問をやられているようです。その拷問の実態ですが、男女とも素裸にされて性器などに電気ショックを加えられたり、身体のあちこちをタバコの火で焼かれたり、何時間も逆さ吊りにされて厳寒の中に放り出され、高圧ホースで冷水を噴射された上でなぐる、けるの暴行を受け、糞尿を飲まされる人々もいるそうです。まさにファシストどもの拷問のやり方であって、絶対に許せません。

しかし、このような卑劣な拷問と弾圧が行なわれ、それが拡大し、苛酷になればなるほど、人民の戦いも発展していきます。ブル新の報道によれば、七九年、八〇年とチリ人民は、三月八日の国際婦人デー、五月一日のメーデーに、公然と集会とデモを行なったそうですし、逮捕された後「行方不明」となった人々の家族による抗議のハンストが闘われているとのことです。そして、先程書いた九月の国民投票という茶番の直前には、厳しい警戒体制が敷かれた中で、七千人もの集会が開催され、街頭では若者たちによるデモやビラまきなどが行なわれているそうです。また、チリ紙「ラ・テルセラ・デ・ラ・オラ」によれば、「最近二〇ヶ月間で起った武装行動は一九八件、そのうち一六件は軍警の兵舎、もしくは隊員に

対する攻撃である。これらの行動で逮捕されている者はほとんどいない。」ということです。キューバ共産党の機関紙「グランマ」によれば、MIR（左派革命運動）などの都市ゲリラは、バスを捕獲したり、国立歴史博物館に所蔵されていた独立旗を奪取するなどの武装宣伝や、活動資金獲得のために、企業、銀行を襲撃しているということです。一九八〇年四月一二日には、MIRと他の都市ゲリラ部隊が連携して、首都サンチャゴの三つの銀行を同時に、「よく練られた計画、俊敏な行動で、何らのミスもなく襲撃」し、七〇万ドル(!)も奪取したそうです。このように、チリのMIRなどの都市ゲリラは、苛酷な状況下にしたたかに存在し続け、武装闘争＝都市ゲリラ戦を強化して、大衆運動の前進と連動して発展しているのです。

日帝は、一九七三年九月一一日のピノチェトらによる反革命クーデター以後チリへの侵略を強め、一九七七年の時点で、チリの輸出入に占める日帝の比率は、輸出先で第二位（一四・七%）、輸入先で第三位（一一%）になっています。そして、七九年には、「日本・チリ経済委」なるものを発足させ、これまで以上にピノチェト反革命軍事独裁政権を、政治的、経済的に支えつつ、一層チリ人民への弾圧に荷担し、搾取を強め、チリの資源を収奪しようとしています。ピノチェトの来日は、このような日帝とチリ反革命軍事独裁政権の関係の深まりの中で、七九年八月、当時の外相園田直がチリを訪問し、チリでの人民に対する拷問と弾圧を弁護した上でピノチェトに来日を要請したことによって日程にのぼったのです。

そうである以上、われわれは、ピノチェトの来日が、日帝とチリとの反革命同盟を強化するものであり、ピノチェトの来日を許すことは、チリ人民、原住民に敵対するものであることを確認しなくてはなりません。われわれは、いかなる卑劣な拷問と弾圧にも屈しないで闘い抜いているチリ人民、原住民に呼応し、連帯して闘わなくてはなりません。それにはまず、われわれが日帝本国人としての自己否定実践として、世界帝国主義の中枢に位置する日帝の中枢を撃つ戦いを遂行することであり、そして、フィリピン人民、フィージー人民がピノチェトの上陸を阻止し抜いたように、ピノチェトの来日を許さない闘いを組織することであると思います。

そこで、公然大衆運動をおし進めている友人たちは、今からピノチェト来日阻止に向けたキャンペーンを張り、集会やデモなどを繰り返し行なっていくべきだと思いま

す。そして、にもかかわらず、ピノチェトが来日を強行しようとする時は、そのもくろみを具体的に粉砕し抜く戦いを組織しなくてはなりません。このことを、同志と、断乎とした決意で確認したいと思います。

(3) 受動性を突破する〝政策阻止〟闘争を！

ピノチェトの来日阻止、という主張に対して、それは政策阻止闘争と同じで受動的な闘いだ、と批判する人たちがいるかもしれません。

政策阻止闘争は、敵のタイム・テーブル（時刻表）に従う闘いであり、敵の掌中での闘いであるから受動性をまぬがれない限界をもっている。だから、××反対！とか○○阻止！という闘いを、場当り的にいくらつみ重ねても、それだけでは現状を革命し、創り出すべき未来社会を展望していくことはできない。従って、未来社会を創り出すという目的意識をもって、敵のタイム・テーブルを超えるわれわれの主導性を発揮した闘いを展開すべきだ、と。

確かに、こういったことはいえるでしょう。これまでに、新旧左翼諸党派が、単に党派利害に基づいて、アリバイ的、カンパニア的に、××反対！とか○○阻止！という集会やデモを行なってきたことがあることを否定できません。このような「闘い」については、その限界性をはっきり確認する必要があるでしょう。

しかし、敵のタイム・テーブルを超える闘いといっても、われわれは現実から出発せざるを得ないのですから、現実の敵の反革命を打ち破っていかなくてはなりません。われわれは、日帝の反革命政策、たくらみに対して、その一つ一つをぶっつぶしていかなくてはならないのです。三里塚空港建設、原発建設、CTS建設、USA帝軍・自衛隊基地の拡張、大気・海・大地を汚し、破壊する全ての公害などに反対し、対決する闘いは必要なのです。そして、これらの闘いを孤立分散化させたままにするのではなく、現在、三里塚闘争が軸になって各地の様々な闘いを結びつけているように、連携して力を合わせ、総体として日帝と対決し、追いつめていく闘いをおし進めていくのです。敵のタ

イム・テーブルを超える闘いというのは、こうした現実の闘いの中から生み出していくものであって、決して対権力闘争を放棄し、どこか人里離れた山奥にでも潜り込んで原始共同体の生活を模倣し、そのことで主観的に人類の未来社会を先取り的に建設するなどという自己満足とは無縁なのです。もし、〝政策阻止〟闘争が受動的な闘いであるという批判が、こうした自己満足にふけっている諸君からなされるのならば、現実の闘いを放棄している彼らの日和見主義を批判しなくてはなりません。しかし、もし現実に〝政策阻止〟闘争を行なっている諸君が、自らの闘いの受動性や限界を意識しているのであれば、次のことを確認したいと思います。

われわれの行なう〝政策阻止〟闘争は、その多くが日帝本国人である自分たちの生活、生命を守るためのものとして出発しています。もし、この闘いが、自分たちだけの利益になるように（例えば原発はここにつくらないで、どこどこにつくれ、とか、日本で公害を出されるのはいやだから、他の国に移ってくれ、など）というのならば、それは被植民地人民や他地域に生活する人々に不利益を転嫁するエゴイズムです。しかし、自分だけのためということにとどまらずに、日帝の政策、たくらみが打ち出されてきた背景、根拠を見つめ、それが日帝の延命、あるいは強大化につながることを理解して、そうしたことを許さない闘いへと深めていくこと、つまり、日帝そのものをぶっつぶす闘いの一環として闘いをおし進めていくならば、その闘いは受動性をつき破る質をもっています。それは、自分だけがよければよいという日本人中心のエゴイズムや、その場限りの殺那主義を克服して闘いを拡げ、被植民地人民や、他地域の住民との共闘を実現していくでしょう。

このように、自分の生活の場における生きるための闘いが、他の闘いと連携し、拡大し、深められることによって、日帝を撃ち滅していく戦いの一環として、国境を超えた質をもち得るのです。そしてまた、われわれは、このような闘いの実践の中から、創り出していく未来社会を展望することもできるのです。それは、日帝がおし進めようとしていること、つまり、地球の資源を喰いつぶし、大気、海、大地を汚し、ガタガタに破壊する物質文明社会を維持することを拒否し、人類と自然＝地球が一体となって共生する社会、原発も、CTSも、基地もつくらず、公害もタレ流さずに、人類が楽しくいつくしみあう社会を建設することです。このような社会を、原

始共産制社会の現在的なよみがえりの社会と規定しますと、それは、日帝との根源的な闘争の過程の中から、必ずその形成の道筋をも提示していくことができる、と私は確信しています。

このように、自分の生活の場における〝政策阻止〟闘争が、自分たちのためばかりではなく、被植民地人民や他の地域に生活する人人のためのものであり、そのようなものとして共に担っていくことができるまでに拡大させ、深化させていく時、日帝を撃滅し（世界帝国主義を打倒し）、人類の本源的共産主義社会実現の過渡としての反日共同体を建設していくことができるのです。真の国際主義を発揮して、日帝の掌中での闘いとしての受動性など突き破っていくことができるのです。

従って、ピノチェト来日阻止の闘いは、チリ人民、とりわけ下層の労農人民、原住民、アラウカーノ族、マプーチェ族の闘いに呼応、連帯するものであり、われわれ日帝本国人が世界帝国主義を打倒し、日帝を撃滅していく反日人民戦争の一環としての闘いであると思うのです。同志のエスメラルダ号への攻撃というすぐれて革命的な戦いを継承して、ピノチェトの来日を阻止しなくてはなりません。共に、獄中から、獄外での闘いに呼応して闘いましょう。

久しぶりの同志への手紙なので、ついペンが走りすぎ、まとまりのないままに長くなりました。批判、疑問がありましたらぶっつけて下さい。私は身体のアチコチにガタがきていますが、懲罰弾圧をはねとばすほどにはまだ元気です。これから寒さに向いますが、元気で頑張って下さい。

では、健闘を！